

吹奏楽演奏者に対するイメージの研究 1

萩生田伸子 埼玉大学教育学部心理・教育実践学講座
萩原まこ 元埼玉大学教育学部心理・教育実践学専修

キーワード: 吹奏楽、パーソナリティ、Big Five

1. 問題と目的

楽器や音楽がパーソナリティとどのように関連するか、という問題についてこれまで様々な視点から研究が行われている。Cribb & Gregory(1999)では、Folk fiddlers (マンチェスター周辺のパブでアイルランド音楽を演奏するグループ)、Salvation army bandmasters(救世軍のブラスバンド)、orchestral violins(オーケストラのヴァイオリン奏者)、orchestral brass(オーケストラの金管楽器奏者)を対象とし、Eysenck personality inventory(EPI)を用いて外向性-内向性、神経症傾向、精神病傾向の測定をおこなっている。そこでは“liking to play the clown”および“good sense of humor”という項目において、Salvation army brassがfolk fiddlersより高得点であった。Torrance(2017)では、楽器演奏者、歌手、音楽家ではない人に向け、IPIPを用いてパーソナリティを測定したところ、年齢や楽器の経験年数などの属性によってパーソナリティに有意差がみられたが、個人的にレッスンに通っているか、アンサンブルへの参加年数、週の練習時間ではパーソナリティに差はほとんどみられなかった。楽器のセクションごとにもパーソナリティの差があるかについても測定をおこなっている。ここでのセクションの分類はStrings(弦楽器奏者)、Winds(木管楽器奏者)、Percussion(打楽器奏者)、Brass(金管楽器奏者)、Piano/Keyboard(ピアノ/キーボード奏者)、Soprano voice(ソプラノ歌手)、Alto voice(アルト歌手)、Tenor voice(テノール歌手)、Bass voice(バス歌手)であった。その結果、Agreeableness(協調性)においてAlt voiceとBass voiceの間で顕著な差がみられた。その他WindsとSoprano voice、Alt voiceとWinds、PercussionとSoprano voice、PercussionとAlt voiceの間でも有意差が出ている。またNeuroticism(神経症傾向)については、Soprano voiceとBass voiceが一番大きく差が開いた。Soprano voiceは、他にもWinds、Brass、Tenor voiceとも差がみられた。外向性に関してはVocalist(歌手)がInstrumentalists(楽器の演奏者)よりも高得点であるという結果も示されている。

また、島村楽器株式会社(2019)が自社社員を対象におこなった吹奏楽部に対するイメージに関する調査では、吹奏楽経験者では「変わり者が多い」「にぎやかな人が多い」や「自己主張が強い人が多い」という回答をした割合が未経験者よりも相対的に多くみられた。他方、未経験者では吹奏楽部のイメージとして「おとなしい人が多い」や「地味である」「真面目で固い人が多い」「協調性を重視する」という回答した割合が経験者よりも多かった。また、楽器別にどのようなイメージを持っているかについて、多いものから3つはそれぞれ、フルートは「上品」「落ち着いている」「カッコ良い(かわいい)」、クラリネットは「しっかりしている」「真面目」「性格が良い」、サクソフォンは「目立ちたがり屋」「よくしゃべる」「カッコ良い(かわいい)」、ホルンは「性格が良い」「真面目」「地味・おとなしい」、トランペットは「目立ちたがり屋」「自己主張が強い」「よく

しゃべる」、トロンボーンは「元気」「性格が良い」「変わり者が多い」、ユーフォニアムは「性格が良い」「落ち着いている」「地味・おとなしい」、チューバは「性格が良い」「落ち着いている」「地味・おとなしい」、パーカッションは「元気」「よくしゃべる」「変わり者が多い」という結果となった。

このように、各音楽家のパーソナリティの測定や比較についての様々な研究や吹奏楽の楽器ごとのイメージ調査から、演奏者のパーソナリティやイメージが楽器ごとに異なることが示されてきた。そこで、本研究では吹奏楽に焦点を当て、Big Five 形容詞チェックリストを用いてより広範に吹奏楽経験者及び未経験者のパーソナリティとそれぞれの楽器の演奏者に対するイメージを測定し、担当楽器や経験によってパーソナリティやそれぞれの楽器の演奏者へのイメージにどのような差異がみられるかについて検討をおこなった。

2. 方法

2021年11月2日～2021年11月20日の期間に、吹奏楽経験者と吹奏楽未経験者のそれぞれに無記名のWeb形式による調査をおこなった。ここで吹奏楽経験者の定義は「全日本吹奏楽コンクールの課題曲のような編成の管楽器+打楽器の団体に演奏経験がある人」¹とした。

調査内容は回答者の属性等に加えて、和田(1996)のBig Five 形容詞チェックリストの5因子(外向性(E)、情緒的不安定性(N)、経験への開放性(O)、勤勉性(C)、協調性(A))20項目短縮版(内田・中畝、2004)を用いた回答者自身のパーソナリティ、および、吹奏楽で使われる楽器の中からフルート、クラリネット、サクソフォン、ホルン、トランペット、トロンボーン、ユーフォニアム、チューバ、パーカッションという9種の楽器それぞれの演奏者のパーソナリティ特性に関するイメージである(5段階評定)。調査項目の提示はopen labを用い、演奏者のパーソナリティ・イメージの評定時には楽器の提示順序をランダムにした。また分析にはSPSSを用いた。

以下に調査内容をまとめて示す。

最初に吹奏楽経験者に該当するかどうかを確認した後、

(1)吹奏楽経験者

吹奏楽経験者に対しては、主に担当している(していた)楽器(以下担当楽器と表記する)、年齢、担当楽器の経験年数、性別、回答者本人のBig Five パーソナリティ特性および前述した9種の楽器の演奏者のイメージを測定した。

(2)吹奏楽未経験者

吹奏楽未経験者に対してはまず年齢、性別を回答してもらった。次に、フルート、クラリネット、サクソフォン、ホルン、トランペット、トロンボーン、ユーフォニアム、チューバ、パーカッションの9種類の楽器について、それぞれ知っているか知らないかについて回答を求めた。その後、吹奏楽経験者と同様に回答者本人のパーソナリティおよび9種の楽器の演奏者に対するイメージを測定した。

3. 結果と考察

吹奏楽経験者については289名(男性84名、女性196名、その他2名、回答しない4名、無回

答3名)から回答を得た。回答者の年齢は平均25.37歳、標準偏差8.55であった。

吹奏楽未経験者については92名(男性34名、女性56名、その他1名、回答しない1名、無回答0名)から回答を得た。年齢は平均23.51歳標準偏差7.26であった。なお、吹奏楽未経験者の楽器に関する知識について確認したところ、未経験者全員が知っているとして回答した楽器はトランペットのみでユーフォニアムは45.7%、サクソフオンは37.0%、テューバは23.9%が知らないとして回答した。知らない楽器の演奏者イメージは曖昧になると予想されたが明確な傾向はみられなかった。

次にBig Five²⁰項目の自己評定について因子分析をおこなったところ、吹奏楽経験者群で『洞察力のある(0)』が本来とは異なる勤勉性(C)因子に高く負荷する等、部分的に元の5因子が再現されなかったが、ここでは便宜的に本来の5因子と見なし、逆転項目は反転させた上で自己評定および楽器ごと、因子ごとに尺度得点を計算した。その上で吹奏楽経験の有無など回答者の属性ごとに平均値の比較などをおこなった。なお、今回の調査で用いたBig Five短縮版の5つの因子についてCronbachの α 係数を算出したところ.67から.84であった。

3-1 パーソナリティ得点の比較

(1) 吹奏楽経験者と未経験者の差の検討

はじめにBig Fiveの5つの特性ごとに吹奏楽経験者(以下 経験者)と吹奏楽未経験者(以下 未経験者)の自己評定したパーソナリティ得点を比較したところ、外向性のみで有意差が見られた($t(376) = 2.03, p < .05$)。

(2) 演奏している楽器ごとの差の検討

経験者について、演奏している楽器によるパーソナリティ得点の差異を検討するために多変量分散分析を行ったところ、有意な差は見られなかった(Wilks $\lambda = .84, F(5, 271), p = .47, n. s.$)。パーソナリティ特性ごとに1要因の分散分析を行ったところ、すべての特性で担当楽器による差は見られなかった(外向性($F(11, 276) = 0.87, p = .57, n. s.$)、情緒不安定性($F(11, 277) = 0.63, p = .80, n. s.$)、開放性($F(11, 277) = 1.32, p = .22, n. s.$)、勤勉性($F(11, 277) = 1.25, p = .25, n. s.$)、協調性($F(11, 277) = 1.44, p = .16, n. s.$))。

Torrance(2017)は楽器や声域によってパーソナリティに差があると報告しているが、吹奏楽経験者ではそれとは異なる結果となった。これに関連してCribb & Gregory(1999)は嗜んでいる音楽によるパーソナリティに差があるとしている。吹奏楽経験者内での比較ではなく、吹奏楽経験者と他の音楽の経験者のパーソナリティを比較した場合にはパーソナリティに差異がみいだされた可能性も存在する。

(3) 年齢、楽器の経験年数との関連

年齢とパーソナリティ得点に関しては、全ての項目で有意な相関は見られなかった。ただし、経験者に関しては担当楽器の経験年数($N = 282, M = 9.01, SD = 6.46$)とそれぞれのパーソナリティ得点の相関係数では、外向性($r = .17$)と開放性($r = .17$)のそれぞれにのみ有意ではあるが弱い正の相関が見られた。

3-2 楽器演奏者に対するイメージ

(1) 経験者と未経験者の差の検討

全回答者を経験者、未経験者2群(当該楽器を知っている・知らない)の3群にわけ、楽器ごと

に分散分析をおこなったところ、フルートの外向性($F(2, 301) = 6.72, p < .05$)、勤勉性($F(2, 301) = 4.93, p < .05$)、サクソフォンの外向性($F(2, 298) = 43.56, p < .05$)、開放性($F(2, 298) = 3.36, p < .05$)、ユーフォニアムの協調性($F(2, 297) = 9.44, p < .05$)、テューバの外向性($F(2, 302) = 6.25, p < .05$)、協調性($F(2, 302) = 7.67, p < .05$)、パーカッションの情緒不安定性($F(2, 303) = 7.83, p < .05$)、開放性($F(2, 303) = 3.32, p < .05$)が有意となった。

Tukey または Games-Howell の方法で多重比較をした結果、フルートの外向性および勤勉性では知っている未経験者と経験者の間、サクソフォンの外向性では3群間すべて、開放性では経験者と知らない未経験者、ユーフォニアムの協調性では経験者と知っている未経験者、経験者と知らない未経験者、テューバの外向性では経験者と知っている未経験者、協調性では経験者と知っている未経験者、経験者と知らない未経験者、パーカッションの情緒不安定性および開放性において経験者と知っている未経験者の間に有意差が見られ、おおよそ経験者の方がフルート、サクソフォンなどの奏者は外向的というイメージを持っていた。楽器演奏者に対するイメージは経験者、知っている未経験者、知らない未経験者の順に明確なものとなると予想されたが、得点の高低は必ずしも一貫した結果とはならなかった。

(2) 楽器ごとの差の検討

図 1a および図 1b は経験者の各楽器へのイメージ得点のプロフィール図である(煩雑さを避けるために2つに分け表示した)。トランペット、パーカッション、サクソフォンは比較的類似したプロフィールとなっている。トロンボーン、テューバ、ユーフォニアム、ホルンについても相互に類似したプロフィールを示した。図 2a および図 2b は同様に吹奏楽未経験者について作成したプロフィール図である。おおよその傾向は経験者と同様であることから、経験の有無によらず楽器演奏者に対して一定のイメージの付与はおこなわれているものと推察される。

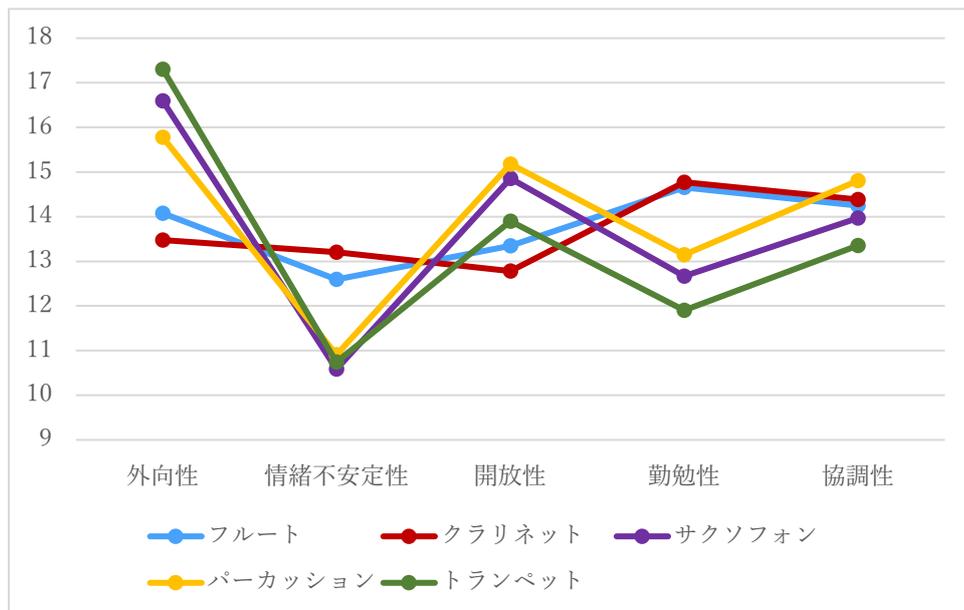


図 1a 経験者のそれぞれの楽器へのイメージ得点(フルート、クラリネット、サクソフォン、パーカッション、トランペット)

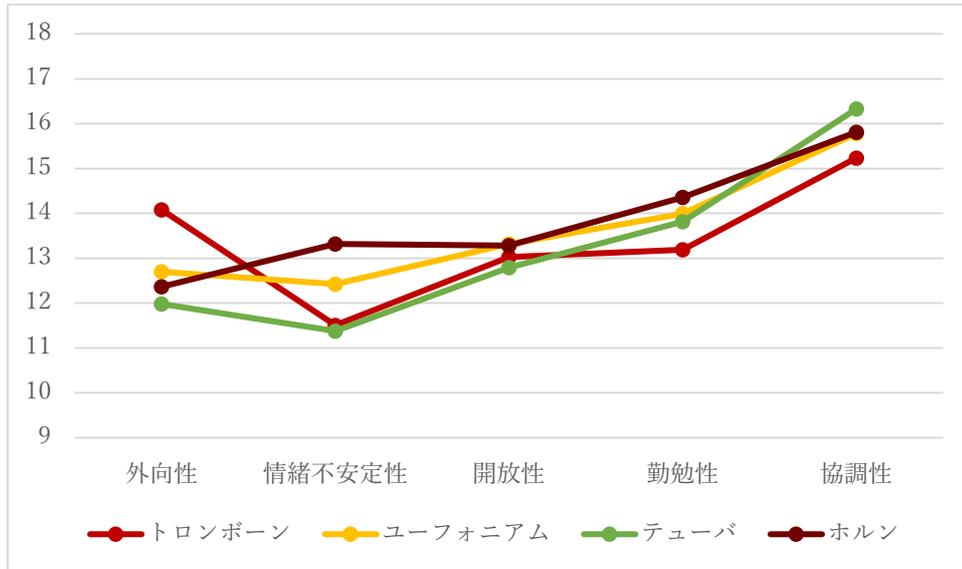


図 1b 経験者のそれぞれの楽器へのイメージ得点(トロンボーン、ユーフォニアム、チューバ、ホルン)

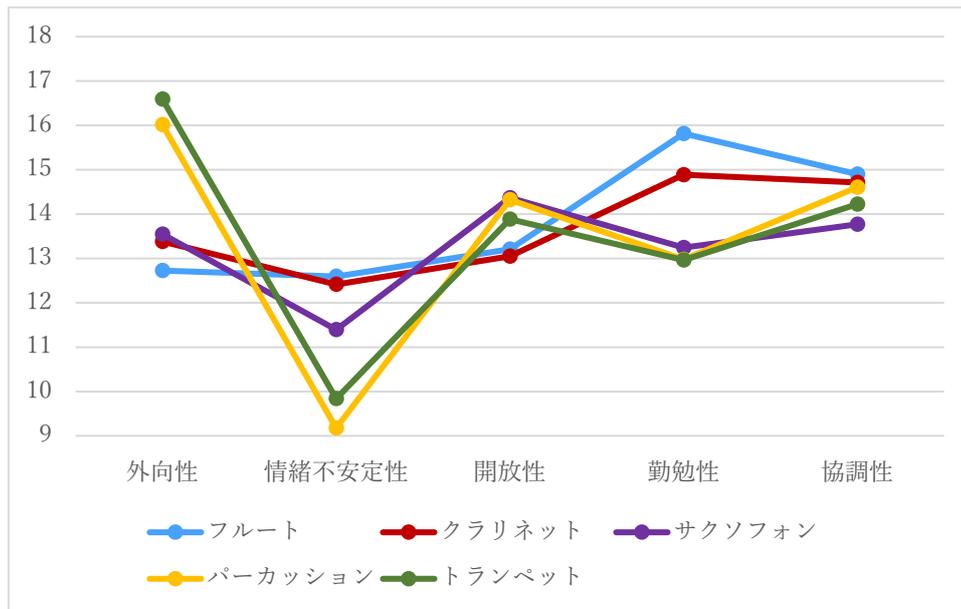


図 2a 未経験者のそれぞれの楽器へのイメージ得点(フルート、クラリネット、サクソフォン、パーカッション、トランペット)

それぞれの楽器の演奏者のイメージが異なるのかを検査するために、経験者の回答についてパーソナリティ特性ごとに1要因の分散分析を行った。その結果、外向性($F(7.24, 1520.08) = 72.70, p < .05$)、情緒不安定性($F(7.44, 1555.45) = 27.79, p < .05$)、開放性($F(7.29, 1516.54) = 28.70, p < .05$)、勤勉性($F(7.40, 1570.58) = 22.49, p < .05$)、協調性($F(7.17, 1483.12) = 26.09, p < .05$)のすべてで有意となった。多重比較の詳細は省略するが、フルート・クラリネットとトランペット・パーカッションの間に有意差がみられた。

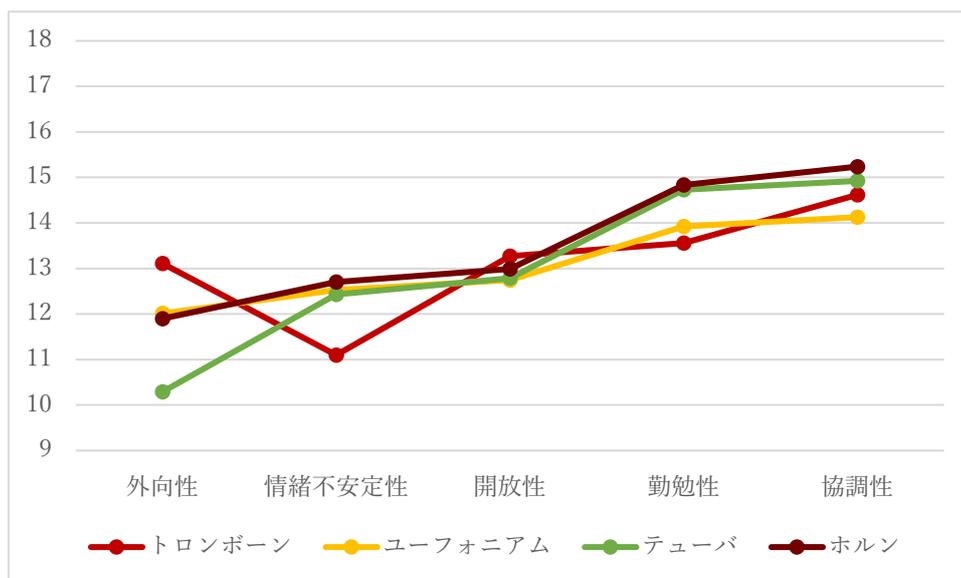


図 2b 未経験者のそれぞれの楽器へのイメージ得点(トロンボーン、ユーフォニアム、チューバ、ホルン)

3-3 パーソナリティと楽器演奏者イメージ

吹奏楽経験者のうち、9種類の楽器の演奏者がおこなったパーソナリティの自己評定と、自らが担当している楽器の奏者のイメージに差があるのかを検討するために楽器ごとに当該楽器を担当しているものを抽出して二元配置の分散分析を行った。結果として、パーソナリティ特性と自己評定かどうかの間の交互作用はすべての楽器において5%水準で有意となった。このことから、楽器の演奏者本人のパーソナリティと、当該楽器演奏者に対して抱くパーソナリティ・イメージは必ずしも一致していない可能性が示唆された。多重比較の結果、フルートとクラリネットでは情緒不安定性と勤勉性の2つの因子、サクソでは外向性、情緒不安定性と開放性の3つの因子、ホルンでは開放性、勤勉性、協調性の3つの因子、トランペットでは外向性、トロンボーンでは情緒不安定性、ユーフォニアムでは開放性と協調性の2つの因子、チューバでは外向性と情緒不安定性の2つの因子、パーカッションでは外向性、情緒不安定性、開放性の3つの因子において5%水準であった。

自己評定かどうかの主効果はホルン、ユーフォニアムのみが5%水準で有意であった。推定周辺平均のプロットを確認したところ、いずれも勤勉性と協調性が自己イメージに比して楽器演奏者イメージが高い傾向であった。

3-4 まとめ

今回の調査では演奏している楽器ごとにみた場合にパーソナリティ得点に有意差が見られなかった。しかし、吹奏楽経験者、未経験者ともに、楽器ごとに演奏者に対して異なるイメージを持っていることが示唆された。この原因になると推測できるものをいくつか挙げる。

一つ目の理由として、楽器の音量や音色、吹奏楽や吹奏楽曲における役割が挙げられると考える。どのような音色の楽器なのか、メロディ、伴奏、連符などの速いパッセージなど、どのような役割を担っているのかということが、それぞれの楽器の演奏者のイメージにつながったと推測される。なお、吹奏楽未経験者であっても経験者とある程度共通したイメージを持っていたこと

から、楽器の音量や音色がイメージ形成に大きな影響を与える可能性も考えられる。

二つ目の理由として、回答者がそれぞれの楽器の演奏者のイメージを回答する際に、一つ目の理由で挙げた楽器の音色や役割から演奏者のイメージを推測するケース以外に、自分の周りにいるそれぞれの楽器を担当する吹奏楽経験者を思い出しながら回答する場合があると考えられる。仮に、今回の調査で回答者が全員知り合いを想起しながらイメージを回答していた場合、それぞれの楽器の演奏者が他の人からどう思われているかを測定したことになる。しかし、今回は質問紙の教示の部分で「それぞれの楽器を演奏している吹奏楽団体のメンバーを思い出しながら回答してください」というようなことを伝えた上で評価をしてもらっていない。このため、今後それを踏まえた調査をする必要があると考えられる。

三つ目の理由はインターネットの影響である。現在、インターネットにおいて、吹奏楽経験者の楽器別の性格について述べたものや、自分に合っている楽器が何かを測定する性格診断など、楽器とパーソナリティの関係について記述されているものが数多く存在する。例えば、noel 編集部(2017)では、「トランペット・サクスは目立ちたがり」、「クラリネットは不思議ちゃん」、「フルートはお嬢様気質」、「トロンボーン・ホルンはのんびり屋さん」、「ユーフォ・チューバは愛されキャラ」というように記述されている。これらのものの大半は十分な根拠が示されているとは言いがたいが、それを見た回答者はそれぞれの楽器の演奏者へのイメージとして受け取ってしまっている可能性があり、ステレオタイプ的な視点を与えているかもしれない。

最後に、本研究の問題点と今後の課題について述べる。今回は主に9種類の楽器の演奏者についてのパーソナリティとイメージについて検討をおこなったが、楽器によっては十分な調査協力者を確保することができなかった。より結果を正確なものにするために、回答者数が少なかった楽器についてはさらに協力者を募り、検討する必要があると考えられる。また、今回は質問紙の長さの関係上、例えば、アルトサクソフォン、テナーサクソフォン、バリトンサクソフォンや、ティンパニ、スネアドラム、鍵盤打楽器など、細かく分けて調査をおこなう事ができなかった。これらをまとめて「サクソフォン」「パーカッション」としたが、細かく分けたときに演奏上の役割や音域が異なるため、詳細な分類をおこなった場合について検討する余地があると考えられる。さらに、イメージを回答する際に、楽器の音色をイメージしたのか、まわりにいる演奏者をイメージしたかで回答の傾向が異なる可能性があるため、イメージを回答する際に何を想起したかを質問するか、あるいは想起する事項を指定した上で調査をおこない、比較検討する必要があると考えられる。さらに、互いの評価に対する非対称性、たとえばフルート奏者が抱くクラリネット奏者のイメージとその逆がどのような関係にあるか等についての検討も今後の課題である。

注

1. 吹奏楽の編成について、全日本吹奏楽連盟が開催している全日本吹奏楽コンクールの規定では「木管楽器・金管楽器・打楽器(擬音楽器を含む)とする。ただし、コントラバス・ピアノ・チェレスタ・ハーブの使用は認める」となっている。本稿ではこの定義を援用した。

参考・引用文献

- Cartin Cribb & Andrew H. Gregory 1999 Stereotypes and Personalities of Musicians *The Journal of Psychology* **133**(1),104-114.
- Tracy A. Torrance Music Ensemble Participation : Personality Traits and Music Experience *University of South Florida Scholar Commons*
- 和田 さゆり (1996) 性格特性語を用いた Big Five 尺度の作成 心理学研究 **67**,61-67.
- 内田 照久・中畝 菜穂子 (2004) 声の高さと発話速度が話者の性格印象に与える影響 心理学研究 **75**,397-406.
- 西島 央 (2017) 社会問題化した「部活動のあり方」に音楽教育はどう臨むのか-中学生及び中学校教員対象調査データの分析から 音楽教育実践ジャーナル vol.5 2017 26-36
- 全日本吹奏楽連盟 (1983) 吹奏楽コンクール実施規定 www.ajba.or.jp/kitei.competition.pdf (最終閲覧 2022 年 8 月 25 日 16:05)
- 全日本吹奏楽連盟 (2019) 2020 年度課題曲編成表
<http://www.ajba.or.jp/2020%E8%AA%B2%E9%A1%8C%E6%9B%B2%E7%B7%A8%E6%88%90%E8%A1%A8.pdf>(最終閲覧 2022 年 8 月 25 日 16:11)
- 島村楽器株式会社 (2019) 【島村楽器調べ】あなたの知らない吹奏楽部の世界！吹奏楽部の実態・イメージを調査 <https://kyodonewsprwire.jp/release/201907309203> (最終閲覧 2022 年 8 月 25 日 16:14)
- noel 編集部 (2017) 吹奏楽あるある 34 選!楽器別の性格傾向や演奏中のおもしろネタまとめ <https://noel-media.jp/news/6228> (最終閲覧 2022 年 8 月 25 日 16:22)

(2022年9月30日提出)

(2022年11月7日受理)